



## 健康と進化・疾病編



進化は必ずしも好ましい方向に向かうものではないということを前回書きました。今、現在をより有利に生き抜くためにはどうあるべきかが基準の全てで、将来のことなどはまったく考えていないのです。

進歩は、物事が良い方へ、望ましい方向へと進んでいくことです。しっかりと将来を見据えて、より良い将来のためには不本意であっても今は多少の我慢をしなければならないということも起こります。余談になりますが、このように書くと皆さんの頭の中に様々思い当たることが浮かぶに違いありません。その様々の中に、一国の、或いは世界のリーダーを自認する人が混じっていることはまことに不幸なことと言わざるを得ません。

過去を認識し、将来を認識してその延長線上の狭間に生きているのが知能を持った人間の特性で、おそらく人間以外の生物には過去や将来についての認識はないのだろうと思われませんが、例えば飼い主の恩を忘れない犬や、食べ物が得難くなる冬に備えて木の実を土に埋めるある種のリスの行動などは、生きるためにたまたま獲得した習性かもしれないし、もしかしたらごく原始的な知能である可能性も考えられます。

もともと生物学的用語として使われるようになった“進化”という言葉は、やがて哲学や社会学などの分野にも影響を及ぼしてそのまま使われることもしばしばということになりましたが、これから病気と進化の関わりについて考えを進めていくにあたって、あらかじめその違いをはっきりさせておく必要があります。例えば、同じように身体の弱い子供が、医療や福祉など、相互扶助の発達した社会環境では、そうでない社会より長く生きられるということは容易に想像できます。また、資本主義社会が行き詰まって破綻しかけた時に、革命とか選挙などでリーダーが代われれば、多少の犠牲は伴うとしても民主主義の社会に生まれ変わることは可能です。しかし、おそらく植物が限りなく繁茂し、捕食する小動物が群生していたであろう古代の地球上で、豊富な食糧に任せて身体を大きくして捕食者を退け、無敵となって生態系の頂点に立った恐竜は、ある時期に突然の急激な環境の変化で植物が枯れはじめると、それは同時に小動物の減少を意味して。身体の大きな恐竜はたちまち食糧難に陥ることになるのです。おそら

く何十万年もかかって獲得した大きな身体は、急に食糧が少なくなったからといって、それに見合うように身体を小さくすることはできません。死滅するしかなかったのです。

後者を生物学的“進化”、そして前者を社会的“進化”としてみるならば、厳密に言えば両者ともに健康に影響を及ぼす重大な要素として見逃せないことではありますが、両者を絡ませると複雑になりますので、ここでは生物学的立場からの記述に留め、社会的要素については個々の立場から重ねあわせて考えていただきたいと思います。

さて、進化について誤解を招かないようにもうひとつ書き加えておかなければならないことがあります。ここまでの説明では、進化は何万年・何十万年という長い期間をかけて、環境に対してより有利な方向へ徐々に変化していくもののように受け取られてしまうかもしれませんが、例えばキリンは樹木の高い枝の葉を食べるにはより長い首の方が有利なので、長い期間をかけて首が長く進化したと考えられてきましたが、実はそうではないかもしれなくて、あるとき遺伝子の突然変異によって偶々首の長い個体が誕生して、それが生存に有利だったことから、その遺伝子を継承した子孫が優先的に選択された結果、首の長いキリンという種が定着したというのです。実際、現時点では化石の発掘などで年代を追ってキリンの首が少しずつ長く変化していったという証拠は見つかっていないのです。

同様に人間の知能も、原始の脳から徐々に高度で複雑なものへと進化したものではなくて、あるとき、遺伝子の突然変異によってたまたま高い知能をもった個体が誕生して、それが生存に有利だったことからその遺伝子を継承した子孫が繁栄したと考えられるというのです。そんな突然変異の生じる可能性は何万年に一度か何億年に一度かの、偶然というよりは奇跡に近い出来事かもしれないといいますが、それにしても大きな疑問が残ります。すなわち、この地球上には何百万種、あるいは何千万種ともいわれる生物が存在しています。いくら偶発的・奇跡的出来事とはいえ、何故人類以外の他の生物に高度な知能を持った遺伝子の突然変異がただのひとつも起こらなかったのでしょうか。

ひとつだけ考えられることは、たとえそのような遺伝子変化が起きたとしても、それがその生物にとって必ずしも有利なものではなかったのではないかということです。つまり、その生物自身の生存、種の存続のまえでは、高度な知能よりも、保身のための、あるいは捕食のための形態的・機能的変化の方が優先されたのではないかということです。

「人類は言葉を話すようになったときに悲劇が始まった」というようなことを何かの本で読んだことがあります。もしそうだとすれば「文字を発明したときにその悲劇は決定的となった」といえるかもしれません。

確かに高い知能と器用な手先を選択した人類は、空を飛ぶことを選択した鳥よりも速く、遠くまで空を飛べるようになりました。熊のように鋭い爪や、狼のような鋭い牙は持たなかったけれども、猟銃や四輪駆動車で勝者となりました。しかしながら、冬季の代表的な感染症として知られるインフルエンザが、今期は過去最高の患者数を記録したそうです。決して手をこまねいていたわけではありません。予防のためのワクチンや治療薬の研究・開発に懸命な努力を重ねているにも関わらずなのにはです。電子顕微鏡でなければ見えないほど小さくて、他の生物に寄生しなければ増殖もできないという不完全さで、勿論知能などあるとは考えられない、知り得る限りで最小のそんな生き物にさえ、遺伝子を巧みに変異させながら増殖を繰り返していく生存戦略に人類はついていけないのです。

仮に地球上の全生物が死滅するかもしれないような天変地異が起きたとしましょう。もし生き延びられたものがあるとすれば、それは人類ではなく、細菌かウイルス、あるいは微生物、あるいはゴキブリのようなある種の昆虫かもしれませぬ。残念ながら人類ではないと考えている研究者が多いに違いありません。

そんな起こるか起こらないか分からない天変地異のことなど心配したってしょうがないし、子供や孫のことならともかく、それより先のことなど知ったことではない。それより現在の人生の方がよほど重大だというなら、その時点で地球上での生存競争における勝者の資格を失ったということかもしれません。知能を放棄して、生存と種の存続という大原則に只ひたすら忠実に生きる生物の方が、ある意味においては遥かに強<sup>したた</sup>かだということです。どうやら文明というものは、発達すればするほど生存についてはともかくとして、種の存続という原則からは遠ざかっていくものらしいのです。

飲食店でテーブルを囲んで料理の到着を待っている家族が、各々スマホに熱中している光景をどうみたらよいのでしょうか。会話が無い。親に対する敬愛も、子に対する慈しみもそこには感じられません。現代社会の縮図を見るようでうそ寒さが背筋を走る思いです。

「本当の不幸を知らない人には本当の幸福の味はわからない」と言いますが、幸福に浸りきってしまうと不幸に堪えがたくなるものです。私たちは、何時襲ってくるか分からない災害に対して、平常時から時折思い起こして心の準備くらいはしておいたほうがよいかもしれません。

昭和天皇が崩御されて平成になったのはついこの間のことのように思っていたら、いつの間にか30年も経ってしまって、その平成も天皇の御意志によって終わりを迎えるとのこと。今更とは思いますが、私自身が覚悟を新たにするためにも、平成時代に起きた主な自然災害のあらましを、読売新聞を参考に振り返ってみたいと思います。

平成 3 年 6 月 3 日	長崎県雲仙・普賢岳で大規模火砕流 死者 40 人 行方不明 3 人
平成 5 年 7 月 12 日	北海道南西沖地震 (M7.8) 死者 202 人 行方不明 28 人
平成 7 年 1 月 17 日	阪神・淡路大震災 (M7.3) 死者 6434 人 行方不明 3 人
平成 16 年 10 月 23 日	新潟県中越地震 (M6.8) 死者 68 人
平成 17 年 12 月～18 年 3 月	新潟県津南町で 416 cm の積雪を記録 死者 152 人
平成 19 年 7 月 16 日	新潟県中越沖地震 (M6.8) 死者 15 人
平成 23 年 3 月 11 日	東日本大震災 (M9.0) 死者 1 万 9563 人 行方不明 2539 人
平成 23 年 9 月 3 日	台風 12 号による紀伊水害 死者 82 人 行方不明 16 人
平成 26 年 8 月 20 日	広島土砂災害 死者 77 人
平成 26 年 9 月 27 日	御嶽山(長野・岐阜県境)噴火 死者 58 人 行方不明 5 人
平成 28 年 4 月 14 日	熊本地震(前震 M6.5 2 日後の本震 7.3) 死者 254 人

主なものを拾っただけでこれだけあります。自然災害と進化と何の関係が有るかと思うかもしれませんが、被害を大きくしている裏に、開発や文明の発達など、人類が獲得した進化が深く影響していることを忘れてはなりません。

人災に至っては、地下鉄サリン事件をはじめとするオウム真理教による狂妄的な一連の凶悪事件。福島原発事故がその極みで、航空・列車・船舶の事故。大小の交通事故や故意あるいは偶然の殺人事件などは毎日のように起こっています。

太陽フレア・黒点・磁気嵐などの言葉を耳にしたことがあると思いますが、地球上の人類はじめすべての生物がその活動のエネルギー源を太陽に依存しています。太陽は人類のために輝いているのではないのです。人類がそのことに気付いたのはそう古いことではありません。数世紀前(具体的にはコペルニクスが地動説を提唱する 16 世紀)までは、太陽や月をはじめとする天体は地球を中心に回っていると本気で信じていたのです。

エネルギー源を太陽に依存しているとすれば、太陽の変動はそのまま地球上の生物に、その依存度に応じて影響を及ぼすこととなります。紫外線、自然放射能、電波障害など。例えば猛暑とか厳寒の時期に長期停電が起き





## ～健康川柳～

### 半袖とコートが行き交う花日和<sup>はなびより</sup>

今年の3月は暖かい日が続いて、19日には東京で早くも桜の開花宣言。ところが、21日（春分の日）には思いもかけない雪景色をみることになりました。それでも、多分雪にはならなかったのかもしれない都内では、24日に満開と発表されました。その後も好天が続いて、4月4日には東京で26.2℃という今季初の夏日を記録しました。井之頭公園の桜も大方は散りましたが、目線を下に移すと池の吹き溜まりには見事な花筏。



ネットより

周囲には山吹、椿、雪柳、諸葛菜<sup>しょかつさい</sup>(花大根)、射干<sup>しゃが</sup>、堇<sup>すみれ</sup>など。家々の庭にはパンジー、チューリップ、ハナニラ、ドウダン、木瓜<sup>ぼけ</sup>、ミツバツツジ、ハナミズキ、その他百花繚乱。それでもこの後、寒の戻りがあるというので油断できません。

早朝、仕事場へ向かうおり、ほんの少しだけ遠回りになりますが、時々井之頭公園の坂を下りて通り抜けていきます。公園は相変わらず顔は同じでも、装いは季節に応じていつも新鮮な姿で迎えてくれます。

梅散りて鶯鳴いて桜咲き公園にまた春は巡り来

そうして何時の間にか歳をとって行くのでした。

